

■今月の特選句

2013年12月号

消費税取るようにして胡麻搾る

伊藤浩睦

胡麻の搾り方は知らぬが、消費税を例にして説明すると胡麻の搾り方が分かるという不思議な句。胡麻の搾り方の説明書に書きましょう。

除夜の鐘下向いて聞くスマホ病

栗倉健二

目と耳の異なる機能を使い分けるのはいいが、鐘に集中出来ないのが難点。どちらかに重点を置くのが旧人類。新人類は、「ながら」が得意。

野分くる次の野分を従えて

高橋マキコ

俳人の多くは、眼前の野分だけを描くのだが、これは視野の広い作品。今の野分について来るのは部下の野分か。その部下の野分も部下の野分持ち。

喧嘩のタネはサンタさんのいるいない

上山美穂

煙突がなくてサンタの困惑す。煙突の有る無しも喧嘩の論点に。父さんがサンタとわかる高学年。モノゴコロつく頃に止む兄弟喧嘩。

散り終へて糞だけ残し白粉花

井口夏子

上品な白粉花は花期を終えると黒い種を残す。それを「糞」と表現したところに可笑しさが。咲き終えた人間は、後に何を遺せるか。

懐手有言なれど不実行

麻生やよひ

横着や口先だけの懐手。そもそもが横着な季語。懐手抜いて手を出すうるさ方。ピストルがあるやも竜馬の懐手。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

猫の名か子の名か迷ふ年賀状

・・・名の付け方がニャンとも不思議

横山喜三郎

蔓芋や連なり出づる大家族

・・・芋の世界にや核家族なし

山下正純

あの猛暑倍々返し大寒波

・・・来る夏はまた倍の猛暑に

伊地知寛

芒原指揮するすすき定まらず

・・・てんでんばらばらコンダクターは風

奥脇弘久

大白鳥関取のごと沼上がる

・・・続く家鴨の幕下のごと

柳 紅生

間の手の下手きはまれりばつたんこ

・・・上手だったら学習される

金澤 健

ぐうたら刻いとほしき温め酒

・・・まさか年中ぬくめ酒では

菅野あたる

席譲る方も大きなマスクして

・・・目の表情で譲り譲られ

山本 賜

網を張り縄張り確保女郎蜘蛛

・・・マーキングなど必要とせず

久我正明

季重ねも着重ねもあり菊日和

・・・言葉遊びに馴れての一句

黒田忠一

万歩計だけが元気なきのこ狩

・・・来ただけはまた歩かにやならん

小林英昭

直ぐ孫にじやれつく爺や猫じゃらし

・・・狗尾（えのころ）草と書いても猫か *狗=犬

壽命秀次

すき焼きの肉は霜降り偽装品

・・・脂肪注入伝統技能士

津田このみ

■今月の滑稽句

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| | 今生のイエローカード残る虫
生身魂つんぼ棧敷でケセラセラ | 青木輝子
青木輝子 |
| 【佳作】 | 仮の世の手枷足枷おけら鳴く | 青木輝子 |
| 【佳作】 | 青からは一途に赤き柿へひた
秋寒し棄て犬多き別荘地
生垣に覆い被して烏瓜 | 青山桂一
青山桂一
青山桂一 |
| 【佳作】 | 本当の空あり古都の天高し
あれとこれ菓数へてそぞろ寒
色鳥や風の収まり飛行機翔つ | 秋月裕子
秋月裕子
秋月裕子 |
| 【佳作】 | シニカルに非ず横着漱石忌
だんだんに遠慮なくなる隙間風 | 麻生やよひ
麻生やよひ |
| 【佳作】 | ハロウインの後の南瓜をどうすべえ
孕み女の腹に支へて持つ南瓜
熟柿食ぶ八十路は八十路の貌をして | 有吉堅二
有吉堅二
有吉堅二 |
| 【佳作】 | 温暖化木の葉散り遅れ赤面す
招くとも招かぬとも見えススキかな | 粟倉健二
粟倉健二 |
| 【佳作】 | 昼飯はいつもお握り小六月
大学を出て炭を焼くちゃんちゃんこ
狸畏かけて大鍋買ひに行き | 飯塚ひろし
飯塚ひろし
飯塚ひろし |
| 【佳作】 | 新入りの犬が吠えまく休暇明け
弁当のテープもどかし腹の虫 | 井口夏子
井口夏子 |
| 【佳作】 | 永らえて人生八十猫十八
百メートルごとキスしつつ行くハネムーン | 池田亮二
池田亮二 |
| 【佳作】 | 会議後に楽しみ多し神の旅
神等去出やおひとり様に土産あり | 石川セツコ
石川セツコ |
| 【佳作】 | けふまでは神も仏もクリスマス
曾祖父の目利きの名器枯尾花 | 伊地知寛
伊地知寛 |
| 【佳作】 | 妻話す主語はいつでも脳に置き
孫できて妻の母性が我に向き | 伊藤慈秀
伊藤慈秀 |
| 【佳作】 | 春画展局所隠すも文化の日 | 伊藤浩睦 |

	オランウータン痔瘻なりしか初時雨	伊藤浩睦
【佳作】	原発に人住まぬなり小鳥来る 予報士の予報的中台風来 東京に来て東京の雪景色	稲沢進一 稲沢進一 稲沢進一
【佳作】	団栗やコロッと根元あーうれし 食べて寝ておよそ縁なき文化の日 家事手抜き田中神様見る夜長	井野ひろみ 井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	石菫の花寺の境内明るくす 冬日向亀虫二匹縁側に 大輪の白菊棒に支えられ	今城夏枝 今城夏枝 今城夏枝
【佳作】	秋風や髪多きとき在りし日も 亡き親父拳雷落ちにけり 天高しわが黄昏を忘れけり	入江澄泉 入江澄泉 入江澄泉
【佳作】	エスカレーターは駆け上がるもの年の暮 会話させたいコオロギとズムシに	上山美穂 上山美穂
【佳作】	齢とれば子供扱ひ年の暮 人の名の出ず仕舞よ日向ぼこ 死ぬ年を忘れ今年も暮れにけり	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
【佳作】	兄弟のいまは仲良き七五三 八十の恋のはなしや茶が咲けり ハロウィン妻が昔のことを言ふ	越前春生 越前春生 越前春生
【佳作】	捨案山子大河ドラマと朝ドラと 散るのみの紅葉羨む濡れ落葉	奥脇弘久 奥脇弘久
【佳作】	神留守の狛犬を踏む悪鴉 鴝の贅健忘症かも知れず 肥後守切れ味今に文化の日	笠 政人 笠 政人 笠 政人
【佳作】	店頭の試食の林檎褒めてやる 正坐から胡坐に組むと小鳥来る 団栗を少し歩いて樹へ放る	加藤 賢 加藤 賢 加藤 賢
【佳作】	鴝高音夕暮れ時に誰を待つ 秋祭雨にも負けず子供会 尖閣や台風来れば平和なり	門屋 定 門屋 定 門屋 定

【佳作】	案山子にも流れるラジオ体操曲 翁逝き茸山の秘所謎のまま	金澤 健 金澤 健
【佳作】	神仏耶蘇も同地に神無月 聴く力忘るる脳や台風裡 手に触れてこれぞまま子の尻ぬぐひ	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	応対に犬が出てくる神の留守 秋の夜や片付け早し宴の果て	菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	田の中に立つは難し案山子寝る 黄落やイエローカードよく切られ	久我正明 久我正明
【佳作】	花道を探しあぐねて残る虫 謀りごとめぐらしてゐる神の留守 ふかふかの土に熟柿の落ちにけり 十月のみんな最早鳴き果つる	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子 黒田忠一
【佳作】	三日分一気に日記を書く夜長 ふつつつと飯炊き上がり秋刀魚焼く 杜鵑草そばかす少女のようであり	小泉花子 小泉花子 小泉花子
【佳作】	焼網に秋刀魚の足がをさまらぬ 月の出はまだかと忠治おかんむり	小林英昭 小林英昭
【佳作】	よく笑いよく食べよく寝成人病 古希夫婦血圧計で医者ごっこ 台風にとばされそうなレポーター	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
【佳作】	秋茄子も温室育ち嫁姑 五七五数字遊びや七五三 携帯に小さき世界や小さき秋	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
【佳作】	看板の錆付き落ちる店の秋 生ネタや老舗が偽の枯落葉 紅葉狩渋滞どんたく疲れ旅	柴田止揚 柴田止揚 柴田止揚
【佳作】	大根の足を洗ってしまひけり 帰りなばお帰りといふ良夜かな 警察のお咎めもある夜なべかな	下嶋四万歩 下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	虫の音を蹴散らし妻の帰還かな 食の秋体重計を妻片す	壽命秀次 壽命秀次

【佳作】	天上と天下覗きし松手入 白い羽根朱に交はれば赤い羽根 恥をかくことにも慣れて雁渡し	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	目と耳が器用に働き出す十二月 トボトボ農道山頭火が酒持って現れる 白状するまで渋柿の皮ずるずる剥く	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	秋深しYシャツ着てき話し聞き 秋の風白いくつ下革靴に 暮の秋スニーカー履き歩く日々	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	陣太鼓打って響かず社会鍋 新走飲酒運転駄目ですと 時雨傘ついつい買って能天気	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	ハロウインの死神隣に郊外電車 スニーカーはいて雨降り七五三 芋喰っている間に大利根くれなづむ	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	飛ぶ鳥の吹き上げられし野分前 ベランダで鴉の集ひ冬隣	高橋マキコ 高橋マキコ
【佳作】	その皺を褒められ年初の飾り梅 老化の二文字印籠のごと木の葉髪 もう彼岸なんですなほら赤い花	高橋素子 高橋素子 高橋素子
【佳作】	捨てられし草履のごとし朴落葉 大きくさめ居眠り猫も振り向きぬ 庭すみの揺られし大根腰を曲げ	田中章子 田中章子 田中章子
【佳作】	秋深きクンダリニー瞑想せり 秋の夜を舐める眉間のチャクラ 牝れ飛耳長目なりしの夜長かな	田中 勇 田中 勇 田中 勇
【佳作】	箒の目立てある巫女や神無月 留守居して月に吠へたき日もありし サンチョとなり生きし六十年(むとせ)や衣被	田中早苗 田中早苗 田中早苗
【佳作】	桐一葉落ちて俳句のネタとなる シューマイかギョーザか迷ふ秋の昼 釣瓶落とし財布落して足探し	田村米生 田村米生 田村米生

	松茸のひとひら香るお吸い物 注文のおせち料理はどうしよう	津田このみ 津田このみ
【佳作】	翳雲物干し竿の泳ぎ行く 十ばかり屁を放って行く秋の朝 七十分ズバツと独演秋の暮	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	文化の日名誉教授の丸眼鏡 一本がもう一本となる夜寒 神集い昨今議案目白押し	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	見廻して無花果貰ふ安房の在 秋高し富士見橋より仰ぐビル 毬栗の実のひとつだになき歩道	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝
【佳作】	飼猫に似てきし妻の日向ぼこ 飼犬に似てきし夫の耳袋 クリスマス謂れ知らねどほろ酔うて	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	秋の夜のラジオ叩いて虎造節 虎造を真似てばったと秋扇 石松の飲みねえ食いねえ伊予蜜柑	西をさむ 西をさむ 西をさむ
【佳作】	台風を門前払いの伊予の神 松茸の香り嗅ぎつつ産地見る 新酒美味過ぎほろ酔いすぐに過ぎ	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	長き夜の羊が一つ二つ万 路地奥に狼煙あげをる秋刀魚かな 秋の昼うわさの電話来たりけり	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	レターパックに「ゆめぴりか」てふ今年米 知らざりし一目惚れとは米のこと 稲雀しばらく家に寄り付かず	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	道行の片割れの身か穴まどひ 冬の蠅猫の手先にあやつられ 人違ひのマスク同士の茶番劇	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	色艶を審査基準に柿選ぶ 刀根柿や丸くまとまること嫌ひ 立冬や太めの眉が流行るらし	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
	雨に濡れ幟待ちみる秋祭	藤岡蒼樹

【佳作】	村祭子の法被減る笛の空 鯛骨の煎餅試食秋深む	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	べつたら市BTIと申すまじ 身に入むやみんな昔は若かった 表情ののほほんとした罔かな	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
【佳作】	生命の輪つなぐ里山秋の暮 着陸の不気味な沈黙秋の風 ザックザク五色の落葉踏み登校	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	豊作の松茸我に縁のなき 秋高し穂高の峰の輝きぬ 雨上がり小梨の赤き実煌めきて	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	ままごとの夫婦気取りや神の留守 枯螻蛄に幼児チンポコ振り威嚇 わが恋は無害にて候日向ぼこ	松井まさし 松井まさし 松井まさし
【佳作】	おだてれば草の実さらすストリッパー この国にあやまり好きな狸をり 狂ひ花新宿花園ネオン街	松尾軍治 松尾軍治 松尾軍治
【佳作】	増税に発泡も置くビヤホール おもてなしまずは亭主に新サンマ 十月や神の居ぬ間に天地荒る	丸山絃一 丸山絃一 丸山絃一
【佳作】	野良猫の腹すかし鳴く冬隣 木々の間に余韻を残し鹿の鳴く 実柘榴やふり向く人もおりませぬ	三塚不二 三塚不二 三塚不二
【佳作】	いのこずち着けた積りがつけられて 秋晴れやコンビニむすびの総動員 近道や手ぐすねしてるいのこずち	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
【佳作】	小鳥来る鳥語で日課促せり ハロウィン南瓜の面の歪なり シクラメンぽっかり空いた日曜日	宮森 輝 宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	我が物顔や隣の猫と葛の原 アンパンマンの満面の笑み十三夜 栗鼠貌で南瓜の種を噛み砕く	百千草 百千草 百千草
【佳作】	息一つじんと凍みいる虫歯痛	森岡香代子

	お叱りは想定外の文化の日 政治家の嘘か真か赤い羽	森岡香代子 森岡香代子
【佳作】	身近い秋短い秋見つけた 火の用心トリ沙汰される三の酉 神の留守まさか厄座と銀行が	森 要 森 要 森 要
【佳作】	木枯らし一号と予報士寒さうに 初場所の花道を行く大銀杏 枯芒昭和のごとく褪せてある	八木 健 八木 健 八木 健
【佳作】	文(ふみ)の文字文書の文(あや)や文化の日 薬研堀(やげんぼり)置いてけ堀や薬喰ひ はたき手に本屋の主煤払ひ	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	一定のめどの付きたる七五三 節電の窓際族の日向ぼこ	柳 紅生 柳 紅生
【佳作】	末期癌舞茸美味しとペロリ食べ 枯落葉意識し始め癌の夫 芒野に隠れじやれつく吾が子猫	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	秋寒やおてんとさまにありがとう 週替はりメニューのやうな台風禍	山下正純 山下正純
【佳作】	秋高し御祓受ける喜寿の顔 颱風が節節痛め通過する 亀虫の美食となりて小菊かな	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	寒木瓜のなんか発音気になつて 誤表示ではありません新米です	山本 賜 山本 賜
【佳作】	美人妻見せびらかせて年賀状 この年の賀状も誤植そのままに	横山喜三郎 横山喜三郎
【佳作】	邑はもうじじばばかり松ぼくり 秋刀魚焼く炎燻りて鰯夫めく 月見酒もう酔ひ痴れる事もなし	渡辺さだを 渡辺さだを 渡辺さだを